



今月のミニ展示コーナー 解説シート

【展示のテーマ】

今月は、市内惣社に位置する「中台遺跡」と「神門古墳群」を取り上げます。

遺跡の主体となる弥生時代終末期は、ちょうど倭国女王卑弥呼が生きた時代と重なることから、「邪馬台国時代」とも呼ばれます。遺跡からは他地域の特徴をもつ土器が多く出土したほか、地域を率いた首長の居館に関連する可能性がある方形区画が発見されるなど、注目すべき成果が得られました。

中台遺跡の概要

遺跡は上総国分僧寺跡と同一地に位置し、東日本最古の古墳と言われる神門古墳群を残した人びとの母村と捉えられます。国分寺台地区の区画整理に伴い発掘調査が行われ、弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴建物350棟、掘立柱建物1棟、方形区画溝2条などが見つかりました。



中台遺跡周辺の航空写真（中央が市役所）

遠隔地交流の結節点

弥生時代終末期には、列島規模で遠隔地交流が活発化したことが知られています。中台遺跡周辺には、長平台遺跡・南中台遺跡・天神台遺跡・蛇谷遺跡などの大きな集落が密集して存在し、東海や北陸、近畿など他地域の特徴をもつ土器が出土します。北陸系はすべての用途の土器がそろって出土し、住居のかたちもこの地域の特徴を示すものがあることから、直接的な移住も想定できますが、遺跡から出土する土器の多くは在地系であることから、もともとの住人を一掃するような規模や性格の来訪者ではなく、各集団がこの地で共存していた様子がうかがえます。

遺跡周辺が交流ルートに組み込まれ、その結節点として中核的な役割を果たしていたことがわかりますが、類似した遺跡の在り方を示す地域が三河（愛知県）の矢作川流域にあります。各地域との直接交流というよりは、三河が経由地または出発地となっていたのかもしれません。



中台遺跡出土の外来系土器



方形区画と独立棟持柱建物

遺跡からは独立棟持柱建物を伴う、溝で囲まれた区画が見つかりました。独立棟持柱建物とは、建物の妻側側面から離して柱を立てて、切妻屋根の先端の棟木を地面から直接支えるものです。このような建築様式が「神明造」と呼ばれる伊勢神宮の正殿と類似することから、祭式儀礼のための施設だったのではないかと、と言われています。また、もともとは穀物倉庫や集会所のような性格であったものが、弥生時代後期後半から古墳時代になると溝や柵で囲まれ、祭殿として首長居館に取り込まれていったと考えられています。

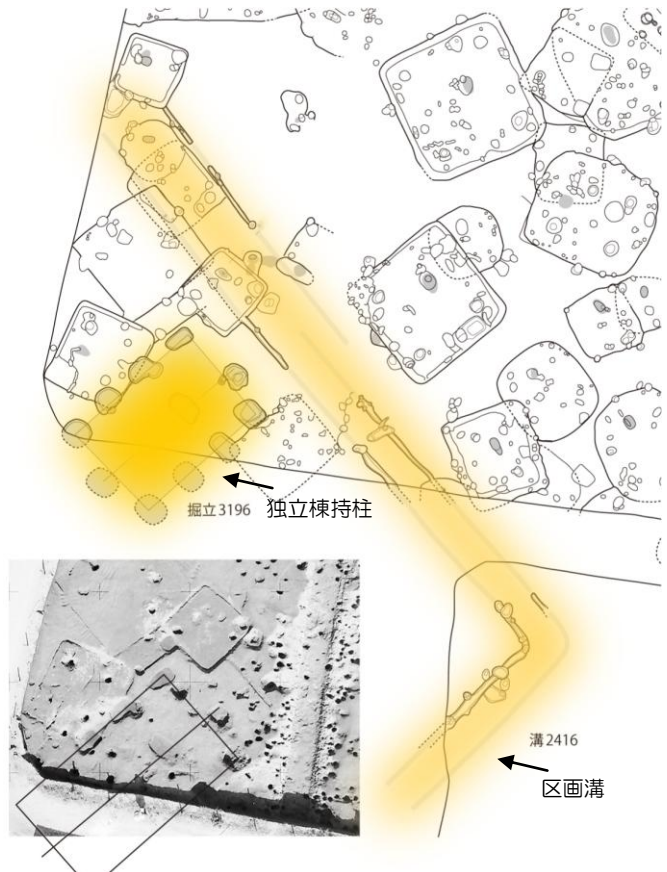
見つかった方形区画はごく一部で、内部に首長の居宅とされるような大型建物や倉庫群を伴うかはわかりません。しかし、同時期の一般的な住居は区画の外に存在することから、非日常的な空間をつくりだすための施設であったことは間違いありません。また、区画内で祭事を行った人物は、神門古墳群の被葬者と考えるとよいでしょう。

神門古墳群の被葬者像

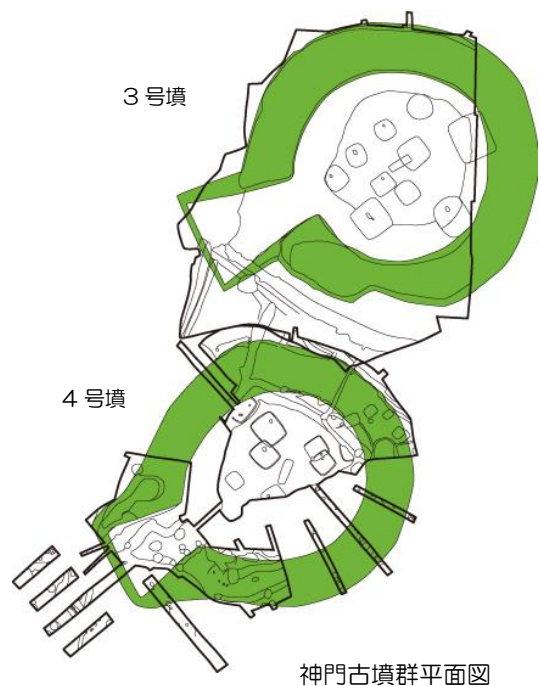
神門古墳群は前方部が未発達で、いわゆる「纏向型」と呼ばれる初現期の前方後円形をしています。5→4→3号の順で相次いでつくられ、その年代は3世紀中頃に位置付けられています。

近畿・東海・北陸・在地という各系譜の土器が供えられることから、被葬者には各集団から共立されたリーダーの姿が浮かびあがります。なかでも「タタキ甕」と呼ばれる近畿地方の特徴を持つ土器が顕著に認められ、古墳群と方形区画の形成

には、近畿と強い結びつきをもった人物がかかわった可能性が考えられます。この時期は、鉄の武器を副葬した墓が現れるのも特徴で、被葬者は鉄などの物資を軸とした広域流通ネットワークに長けた存在として権威をもち、地域の首長として君臨したのかもしれない。



中台遺跡の方形区画施設



神門古墳群平面図